

博士論文審査報告書

論文題目

日本古代建築における様の研究

Study on the Tameshi of Ancient Japanese Architecture

申請者

小岩	正樹
Masaki	KOIWA

2014 年 2 月

建築が、歴史的・社会的存在であることは現在も疑い得ないのに対し、その実感が失われつつあるやに思われる。この原因のひとつに、建築が益々多様な価値や体系を内包しつつあるが、近年における建築様式観、地政学的価値観、そして社会構造観の振れ幅の大きさが際立ち、存在の基本に直結する論理が、その研究方法論から希薄化しつつあるように思われる。本学の建築史研究は、建築生産史学を基軸に据えて進展してきた経緯がある。本研究は、上記のような建築をとりまく状況への著者の問題意識をもとに、これまで培われてきた建築生産史学の成果を批判的に継承しながら、建築の歴史の実像をもう一度取り戻すための新たな建築史学方法論の構築を志したものである。

本研究の具体的な目的は、奈良時代を中心とした古代日本建築の世界を対象に、「様（ためし）」と諸記録に残る造営計画資料を手掛かりとして、その内実や機能、授受関係を検討し、当該期における建築造営の状況を総合的に復原することである。従来、特に奈良時代を中心とする日本古代建築は、架構即形式、さらにそれが様式に近しいものとして受け取られてきた感が否めず、一方の建築生産像としても、律令制に基づいた組織制度研究にて回収される傾向にあった。このような状況下において、本研究は日本古代の建築と建築生産の様相に対し、新たな知見とそれを可能とする新たな研究方法論の導入を試みた意欲的な論考と評価される。以下に審査の要旨を述べる。

本論文は、序論、10章からなる本論、および結論から構成されている。

序論では、近年における研究動向、研究目的や背景、研究方法を記す。特に建築生産史研究への方法論については、既往研究における生産関係像の捉え方との差異を示し、建築生成過程の構造をより実態的・動的に把握するための視点が示されている。

本論の第1章においては、まず、文字史料として記録に現存する様の例の把握を踏まえ、次いで、絵画や彫刻における史学や美術史学と、建築における建築史学との姿勢を比較している。様は、建築史学では生産構造論・社会構造論から、美術史学では作家論および作品論の一環として述べられてきた状況を示し、それらの間を埋める方策が採られるべきことを提唱しているが、実際にこの視点は以下の各章における考察において示されてゆくこととなる。

第2章では、東大寺僧・実忠が制作した小塔殿の様を対象とする。古記録より、東大寺以外の複数の諸寺に造営された小塔殿建築の形式を解説し、実忠の様は一定の規範性を有しながらも厳格に形式を規定したものではなかった点を明らかにしている。従来、様の解釈には、その影響性の強弱から、直写の対象から手本的な意味まで幅があったが、この場合の様には融通性があった点を指摘しており、建築史研究において様の実状が判明した貴重な事例である。

第3章では、同じく東大寺僧・実忠が携わった他の多くの造営活動を対象とし、その参画形態の実態について、機構体制および関係性の側面から述べている。本章では直接的には様は扱われないものの、設計計画資料である様が、造営機構や工程状況の奈辺において登場しうるか、また有効であるか、間接的に

明らかにしており、制作者としての実忠の立場と合わせて動的な生産像が描かれている。結果として、奈良時代後半の寺院造営の体制と運営の実像の解明に迫る意欲的な研究と評価できる。

第4章では、極めて稀有な事例だが造営実状の詳細な文書記録が残る天長年間の東大寺大仏修理を対象に挙げ、造営体制の実態を明らかにしている。勅使、官人、工匠、僧侶などの関係者の背後関係や相関関係から築かれた造営体制は、前章の実忠が置かれた平安初期の造営体制と共通するが、奈良時代との差異が認められ、建築生産像の過渡的段階を示したものとして貴重である。

第5章では、渡来僧・思託が制作したと記される西大寺の八角塔様を対象とし、その機能や実態について述べる。八角塔様が実際の塔の造営に機能した点を述べるとともに、西大寺四王堂にかつて存在したという八角五重小塔をこれに比定するとする見解を新たに提示している。後者は、既往研究も含めて確たる証拠がないために判断が分かれるのが実状であるが、蓋然性のある明確な論旨を構築していると認められる。今後の斯界における研究の深化を俟ちたい。

以上の2章から5章では、主に寺院造営に関する論考であり、特に寺家組織および僧侶個人による建築造営への参画状況を具体的に明らかにしたものである。従来、古代の僧侶による建築造営への関与は、概観的な把握と認識に留まる傾向があったが、造営資料としての様に着目することで、具体的かつ明瞭な事例が斯界に提示された点は評価されよう。

第6章では、奈良時代における図と様との関係について論じている。対象は、国分寺・国分尼寺の造営にて中央政府から諸国に頒下された図と、大安寺の造営にて、留学僧・道慈が将来した唐西明寺の図であり、いずれも機能の観点や類書の記載から、様と認識されうる可能性を指摘している。記録に残る様の実際の資料形態は、史料上の限界から明らかにし得ないが、造営の状況に応じて、様がより一般性をもって存在した可能性を示した論述である。

第7章では、長門国の山陽道駅家における様を対象としている。新造にあたっては中央政府が送る様に従うこととされるが、美麗と維持管理の労との両立のため、具体的な建築方針を伝達する媒体として様が認識されていたことを指摘している。また、少数の事例ながらも、発掘遺構から駅家のおおよその形式性の存在が認められる点を指摘するが、第2章と同様に、具体的事例から様の規範性が推し量れる対象であることを指摘しており、今後の各駅家遺構の発掘成果を注視して検証を重ねることが期待される。

第8章では、天平宝字年間の石山寺拡張造営において、山作所に向けられた様を対象とし、その授受関係と両者の職能について論じている。長上工が様を通じて山作所へ製材の寸法指示を行い、山作所の将領は技術的理解に基づいて様の内容を受理していた点を指摘している。様がその内容に適切な生産関係を構築していた証左として、貴重な事例と考えられよう。

第9章では、同じく天平宝字年間の石山寺造営において、東大寺僧・良弁の指示内容を分析し、その技術的程度を量り、結果として良弁の技能的見識につ

いて述べている。指示は仏堂建築のある特定部材の寸法と材数の変更であり、本事例は、従来、単に寸法変更による美醜の問題と捉えられていた。しかし、その内容が平面の改変に伴う屋根架構形式全体におよぶものである点を解明し、僧侶が建築形式を全体として把握していたことを示すものと論じている。建築形式全体の改変が含意された内容であることを解明した点は、僧侶による建築技能の把握について新たな認識の地平を拓くものと評価される。

第10章では、平安時代末期の大江親通による南都巡行の記録『七大寺日記』を取り上げ、登場する様の字義について検討を加えている。前章までとは異なり、直接的な造営の場面ではなく、その社会通念上の意味の把握を試みている。結果、規範性ではなく形容・様子を意味する点を指摘し、それが平安初期における円仁の『入唐求法巡礼行記』と比べても顕著に認められるため、見聞を旨とする巡礼記による特徴ではなく、時代的変遷であった可能性を推定している。

結論では、以上の各論の結語を要約し、当該期における建築生産像の既往研究の成果を踏まえ、生産関係の具体像を新たに詳細かつ動的なものとして描いている。また、それら関係を媒介する存在である様の性格について、各々定性的に的確に述べている。

以上を要するに、様が表現物であり情報伝達媒体である以上、生産関係と様自体の解明が同時に要求されるが、本論文はその両者への回答となっている。前者においては、既往の研究では不明瞭であった個人単位による造営への参画や、職位を越えた職能等が解明されたことで、より柔軟な造営体制の世界が構築されていた事実を知ることになる。特に、従来知られてこなかった設計あるいは計画の発動因が積極的に抽出されたことは、建築における設計施工の構図の認識に、新たな一石を投じることにつながると評価される。また後者においては、建築が多くの社会的関係を結ぶ上で必要な、道具や技能、方法といった普遍的な項目と同じく、計画資料・設計図書の有する技術的性格と、ややもすると呪術性や象徴性が付与しうる対象であったことも確認している。このような理解は、建築の社会的・生産論的論理の一貫性と、具体表現像の射程を見逃さない緻密な観察眼の両立という、著者が構築した方法論の達成によって導かれたことが注目される。そして、様の事例は少数ながらも、このような交換が古代の建築界に存在したことを解明した点は高く評価でき、ひいては、今後の学術的展開が期待される日本古代建築の後代への影響性とを視野に含めた学術的展開の端緒を拓くものとして、建築史学発展に寄与するところ大である。以上より、本論文は博士（工学）の学位論文に相応しい価値ある内容を持つものと認められる。

2014年2月

審査員	(主査)	早稲田大学教授	工学博士(早稲田大学)	中川 武
		早稲田大学教授	博士(工学) 早稲田大学	中谷 礼仁
		名城大学 教授	工学博士(早稲田大学)	溝口 明則